

令和5年度 Ⅰ学期の学校評価について

令和5年8月3日

筑前町立東小田小学校

本校は、自校の教育の充実に向け、毎学期末に学校評価を下の手順で実施しています。

皆様にお渡しするこの資料は、下の④【公表】に当たるものです。

Ⅰ学期末に皆様へのアンケート調査等で頂いた貴重な回答をまとめましたので、この資料により報告するとともに、さらなる教育活動の充実に生かして参ります。

〔学校評価の手順〕

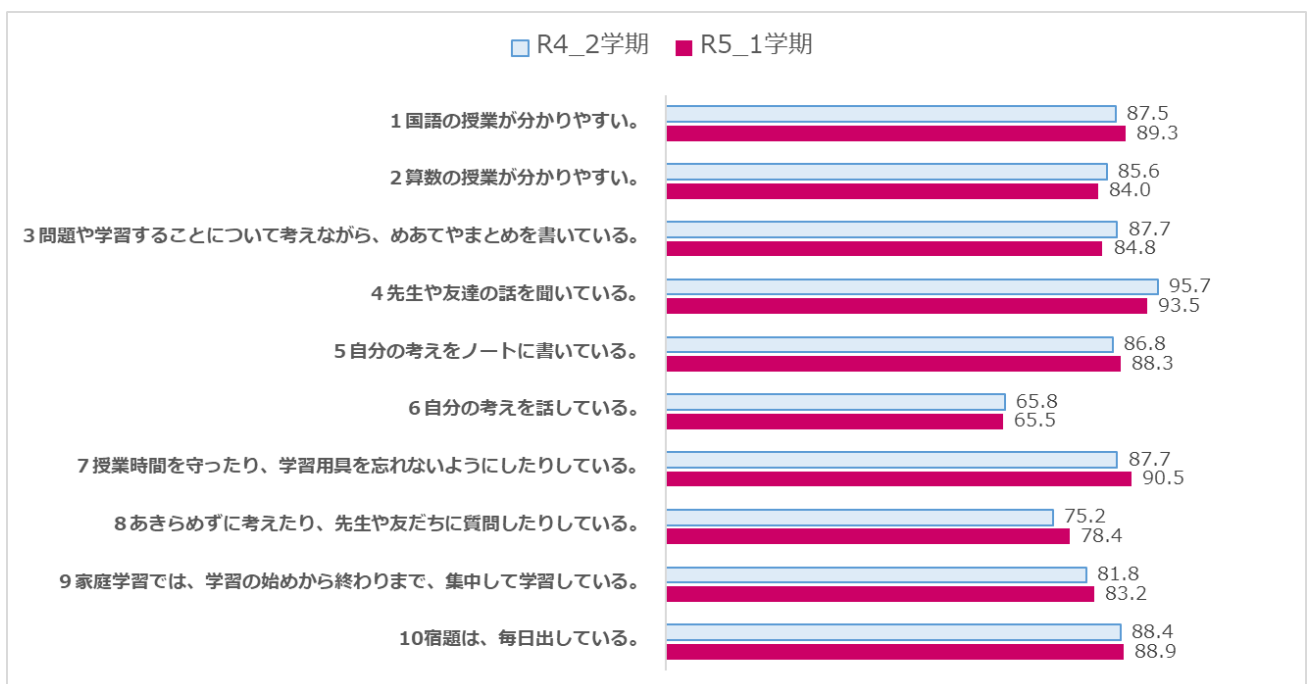
- ①【アンケート】児童・保護者を対象に学校教育に対する声を聴く。
- ②【評価】アンケート結果をもとに成果や課題をまとめる（自己評価）。
- ③【審議】自己評価結果を本校の学校運営協議会に説明し審議を受ける。
- ④【公表】審議を経た自己評価を保護者・地域に公表し、町教委に報告する。
- ⑤【改善】公表した自己評価に従って、学校の教育活動の改善を図る。

グラフ、考察等の見方について

- 棒グラフ及び数値は、質問項目に対する肯定的な回答の割合（「1あてはまらない」「2あまりあてはまらない」「3あてはまる」「4とてもよくあてはまる」のうち3又は4を選択した児童の割合）を表しています。最大を100とします。
- 比較のため、昨年度2学期の割合も付記しています。

1 児童アンケート

（1）学習について



項目 1 - 7

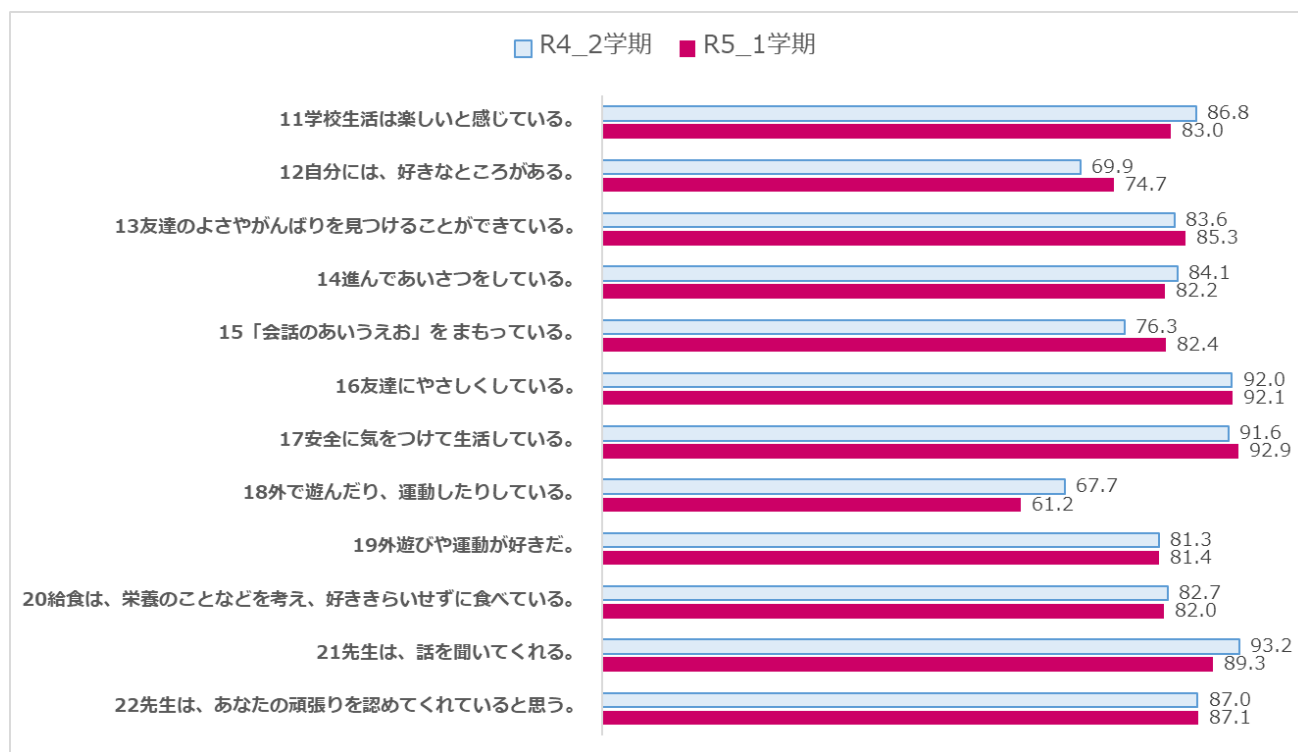
児童一人一人が “学びの動き” を続けている姿

項目 4、5 では、高い数値を示している。多くの児童が、教師や友達の話聞くことや、自分の考えをノートに書くことなど、児童は授業における基本的な学び方が身についていると捉える。特に、児童自身が「私は話をよく聞いている」と自己評価していることは、学級での学習文化が創られているからである。

一方、項目 6 「自分の考えを話している」は、低い数値を示している。この要因の一つに、「授業の中で、自分の考えを話す場がない」ということがないだろうか。「隣の人と話す」「近くの人と話す」「グループで話す」「全体の中で発言する」など、授業の中で話す場を設定し、「何のために（目的）」「何を（内容）」話すのかを明確に示すことで、子どもたちは「自ら学ぶ姿」になっていくと考える。

項目 7 「授業時間を守ったり、学習用具を忘れないようにしたりしている」は、昨年度の数値を上回っている。授業時間を守ることは、一日の学校生活や学習に“構え”をもって生活しているという自立の姿である。今年度から始めた「朝のなのみ読書」や「算数 音声計算」は、1 学期終了時でも児童が取り組んでいる姿が見られる。教師が、日常の一つ一つを大事にしていることの表れである。日常の積み重ねが、大きな成果につながっていくと考える。

(2) 学校生活について



項目 11 - 22

「自分 OK、あなた OK」自己肯定感を高めている

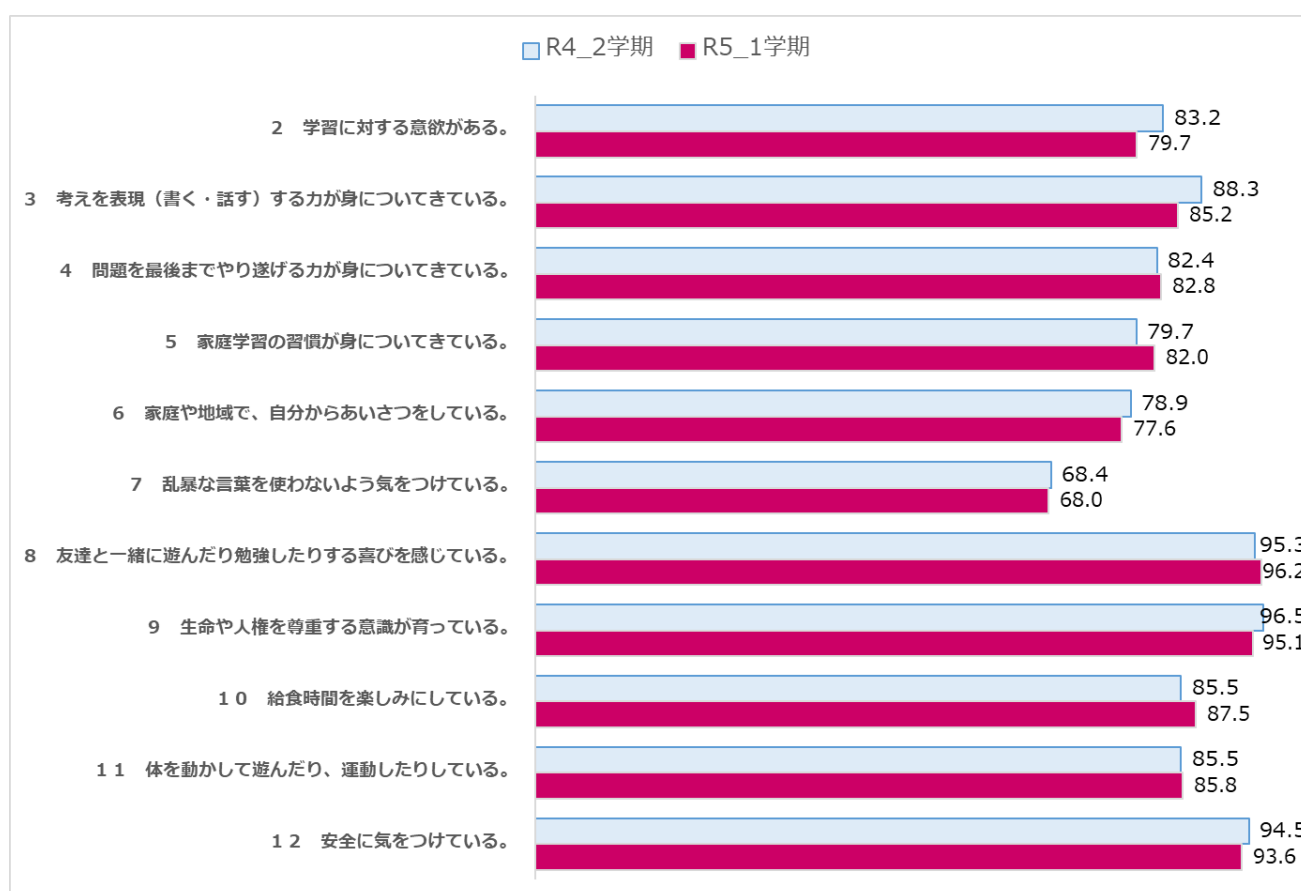
項目 12 「自分には好きなのところがある」は、昨年度の数値を上回っている。児童の自尊感情を 3 つの観点として、「自分を肯定的に認められることができる自己受容」「自分が周りの人の役に立っていると感じる関係の中での自己」「今の自分を受け止め、自分の可能性について気付くことができる自己主張・自己決定」がある。学校や各学級の取組として、

縦割り班清掃、ブロックごとの応援合戦、係活動、集会活動、クラブ活動、特別支援学級の交流学習などを継続してきている。児童一人一人が、集団での活動の中で自分の役割があり、周りとの関係を築きながら行動する場をつくってきたことは価値高いと考える。児童に対する教師の指導と評価が、子どもたちにとっての価値づけとなる。子どもたちの発言、態度、行動に対して望ましい評価をするためアンテナを高くしていきたい。

項目 18、19「外遊び・運動」に関することにおいては、1 学期の天候も関係していると考え。2 学期は、体育委員会による企画や係活動の推進で、「みんなと遊ぶことが楽しい」と感じる取組をつくっていききたい。最大の要因は、「子どもたちと共に遊んでくれる大人がいること」である。

2 保護者アンケート

(1) 学び力・こころ力・からだ力について



項目 6-9

人とのかかわりの中で、言語環境を整える。

項目 8「友達と一緒に遊んだり勉強したりする喜びを感じている」は、特に高い数値を示している。項目 7「乱暴な言葉を使わないよう気をつけている」は、特に低い数値を示している。

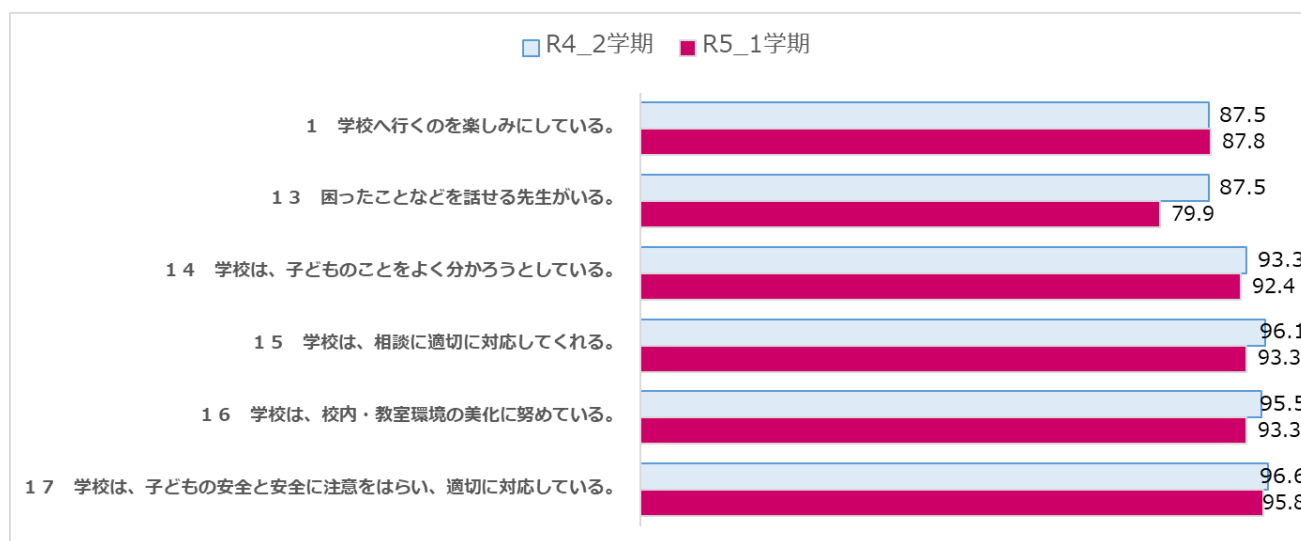
昨年度までの学校評価では、「児童の言語環境の整備と言語活動の充実」に向けて、児童の言語活動に働きかけ、児童の適正な言語活動に機能するように工夫することを示した。特に日常の言葉遣いは、子どもたちの豊かな人間関係、望ましい

なのみ かいわの あいうえお

あ “ありがとう”を ふやそう
 い いつでも げんきよく はなそう
 う うれしくなる ことばを つかおう
 え えがおで はなしを きこう
 お おともだちの めを みよう

集団の形成にも深いかかわりがあり、細やかな配慮が求められている。今後も各教科、道徳、学級活動や児童会活動など様々な教育活動において、「会話のあいうえお」を積極的に活用した言語環境の整備を行っていききたい。

(2) 学校について



項目 1 13 14-17

児童が「楽しい」学校を

項目 1 「子どもは学校へ行くのを楽しみにしている」においては、回答 344 名中 302 名の保護者が肯定的な評価となっている。これは、児童アンケート項目 11「学校生活は楽しいと感じている」において高い数値を示していることと関連していると考ええる。しかし、「あまりあてはまらない」が 39 名、「まったくあてはまらない」が 3 名と、否定的な評価もある。

項目 13 「困ったことを話せる先生がいる」では、昨年度と比較して、数値が下がっている。これは、児童が「先生は、自分の話をよく聞いてくれる」と十分に感じていないことの表れだと考ええる。児童の話を受容的な態度で傾聴し、適切に反応（うなずく・受け入れる・考えを示す・助言する・指導するなど）が大切である。日常において、児童の姿を価値づけすることからはじめていきたい。

今後も、ケース会議やいじめ・不登校対策委員会の継続的な実施を通して、児童一人一人の困り感を把握し、それに対して「いつ・だれが・何を」を明確にした支援の在り方を探っていく。児童が安心できる教室、安心できる学校、児童が楽しい学校を目指していきたい。